

同窓会会長挨拶

劉 庭秀

(研究科長、国際政治経済論講座 教授)

同窓会の皆様には、平素より東北大学大学院国際文化研究科の教育・研究活動に対し、温かいご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。また、国内外の教育・研究・産業界など多様な分野においてご活躍されている皆様の姿に接するたびに、本研究科の教育理念が社会の中で着実に息づいていることを実感し、大きな喜びと誇りを感じております。

東北大学大学院国際文化研究科は、1993年の設立以来、社会・政治・経済・文化・言語・環境などの分野を横断する学際的研究を基盤として、国際社会の諸課題に対応できる人材の育成を目指してまいりました。本研究科の特徴は、単一の学問分野にとどまることなく、複雑化する社会問題を多角的な視点から捉え、理論と実践を往復しながら新たな知の創出を目指してきた点にあります。これまで多くの修了生が、国内外の大学・研究機関、企業、行政機関、国際機関など幅広い分野で活躍されており、その成果は本研究科にとって大きな財産となっています。

近年、世界は大きな転換期に直面しています。世界各地で戦争や紛争が続く中、気候変動や資源・エネルギー問題、人口減少や高齢化、AIをはじめとする急速な技術革新、さらには地域社会の持続可能性など、私たちが直面する課題はますます複雑化し、相互に深く結びついています。このような時代においては、従来の学問分野の枠組みだけでは十分に対応することが難しく、文化、社会、環境、経済、政治などを総合的に理解し、国際的な視点から課題解決を模索する学際的研究の重要性が一層高まっています。国際文化研究科がこれまで培ってきた教育研究の理念は、まさにこうした時代の要請に応えるものであると言えるでしょう。

一方、東北大学は現在、世界水準の教育研究拠点の形成を目指し、「国際卓越研究大学」構想の実現に向けた様々な取り組みを進めています。本研究科においても、研究力の向上、教育・研究活動の可視化、産学連携の推進、社会との連携強化などを通じて、国内外からより魅力ある大学院教育の実現を目指しています。さらに、フィールドワークを重視した教育研究活動や国際共同プロジェクトの推進など、本研究科の特色を活かした取り組みを強化し、世界に開かれた研究教

育拠点としての役割を果たしていきたいと考えています。

このような取り組みを進める上で、同窓生の皆様とのつながりは極めて重要な意味を持っています。社会の第一線で活躍されている同窓生の皆様の経験や知見は、研究科の教育研究活動にとって大きな財産であるとともに、現役学生にとっても将来の可能性を広げる貴重な指針となります。同窓会を通じた交流や情報共有は、世代や分野、さらには国境を越えて人と人とを結びつけ、新たな知的ネットワークを形成する大切な機会でもあります。

国際文化研究科は今後も、同窓生の皆様との連携を大切にしながら、教育研究のさらなる発展に努めてまいります。研究科で学んだ経験や知識が社会の様々な場面で生かされ、持続可能な未来の実現に寄与することを心より願っております。

結びに、同窓会の皆様のみますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げますとともに、今後とも東北大学大学院国際文化研究科の教育・研究活動に対し、変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



国際文化研究科主催行事等報告

報告 1

キャリア講習会

小原 豊志

(ヨーロッパ・アメリカ研究講座 教授)

2025年11月19日、本研究科において令和7年度キャリア講習会「研究の道を共に歩むために——大学院・コロナ禍・就職を通して考えたこと」が開催されました。



国際文化研究科キャリア講習会
研究の道を共に歩むために
—大学院・コロナ禍・就職を通して考えたこと—

日時：2025年11月19日（水）
14:40~16:10
会場：川内北キャンパス
国際文化研究科西棟 302
対象：東北大学の学生
参加費無料

申込方法：Googleフォーム
申込はこちら
申込期限：11月14日（金）

講師：石巻専修大学 人間文化学科 助教 阿部 純

Profile
宮城県塩釜市生まれ
2025年東北大学大学院国際文化研究科
修士課程「アメリカ研究」専攻修士課程
を修了。修士（国際文化）
仙台高等学院附属大学、仙台学院
専門学校、専修学院女子大学
短期大学、ハワイ大学マノア校
客員研究員などを経て現在
専門は日系アメリカ人史

Message
本学が直面している課題は、国際
化に伴って多岐にわたる。研究の
道を進む上で、大学での研究と
実践、コロナ禍における海外調査の
中止や制限、思わぬ「学び」の
機会が生まれるなど、さまざまな
課題が起きている。これらの課題に
対して、皆さんの不安や疑問を少
しでも解消したいと思っています。
本学、専修学院の国際化推進のため、
大学（院）を問わず社会法廷に目を
向けながら、私たちが「共に」研究の
道を歩むために出来ることを一緒に
考えていきたいと思います。

●主催：国際文化研究科 学生・進路指導委員会
国際文化研究科 同窓会

問合せ先：
東北大学大学院国際文化研究科 教務係
int-ikk@grp.tohoku.co.jp
http://www.intcul.tohoku.co.jp

東北大学大学院国際文化研究科

キャリア講習会ポスター

本研究科は、1993年に独立大学院として創設されて以来、30年以上にわたって高度な知の探究と次世代の育成を担い、数多くの修士号・博士号取得者を社会へと送り出してきました。創設当初は研究職や教職を目指す者が大半を占めていましたが、近年のグローバル化に伴う留学生の増加や社会構造の変化を受け、修了生の進路は現在、教育・研究機関のみならず、行政、国際機関、民間企業など極めて多岐にわたっています。このような多様な可能性を前に、進路選択に迷う現役生たちのために、本研究科では毎年、各分野の第一線で目覚ましく活躍されている修了生を講師としてお招きし、学問と職業生活の接点について率直に語っていただく場を設けてきました。

本年度、講師として登壇いただいたのは、石巻専修大学人間文化学科で助教を務められている阿部純氏です。阿部氏は2025年3月に本研究科ヨーロッパ・アメリカ研究講座の博士後期課程を修了し、博士(国

際文化)の学位を取得されました。在学中にはハワイ大学マノア校での客員研究員としての活動や、県内私立大学での非常勤講師としての経験を積み、学問的研鑽と実践的な教育活動を並行して進めてこられました。

今回の講習会で特筆すべきは、阿部氏が専門とする日系アメリカ人史研究の深化と、その学術的・社会的意義について、極めて重厚かつ示唆に富む内容が語られた点にあります。博士課程在籍中、学問の道を歩む中で幾度となく直面した葛藤や苦悩、それらを乗り越えて結実した研究成果の核心は、第二次世界大戦時における日系アメリカ人の戦時強制収容をめぐる歴史的評価の再定義という現代社会にも通底する重要なテーマでした。

具体的に阿部氏は、日系人強制収容をめぐる裁判闘争における個人の戦時経験と「クラス(階層)」という概念に着目し、法的な枠組みの中で個人の尊厳がいかに集団的なアイデンティティとして再定義されていくかを鋭く問い直しています。さらに、アメリカ例外主義と日系人という主題を通じ、日本国内における「リドレス(謝罪・賠償)」概念の受容と変容についても詳細に論じてきました。こうした緻密な研究の積み重ねは学術界でも高く評価されており、2020年には「Historians' Workshop Research Showcase Prize」を受賞するなど、阿部氏は着実にその地位を築いてこられました。

講習会において、聴衆の心を特に打ったのは、こうした学問的進展がコロナ禍という未曾有の困難の中でいかに継続され、昇華されたかという語りでした。大学院生活の極めて重要な時期に重なったパンデミックは、予定していたハワイ大学での海外調査を困難なものとし、資料へのアクセスや対面での議論を物理的に遮断しました。阿部氏は当時の心境を、出口の見えない孤独や焦燥感に直面する日々であったと振り返ります。しかし、氏はその逆境を、既存の膨大な資料を徹底的に読み直す「精読」の時間へと転換し、同時にオンラインを活用した国際的なネットワークの構築へと結びつけました。



キャリア講習会の様子

今回の講演は、先行きの見えないキャリアパスに不安を抱く多くの学生にとって、暗闇を照らす灯火のような有益な機会となりました。学問に身を置く者にとって、「この探究が果たして社会の役に立っているのか」「自

分の声を聞いてくれる人は本当にいるのか」という疑念を抱くことは、むしろ誠実に学問に向き合っている証左であるとも言えます。阿部氏は、自身の経験を糧として、最終的にはそうした孤独な思考の果てに、必ず自身の仕事を受け止めてくれる他者が存在することを、自身のキャリア形成を通じて肌で感じたのだと語られました。また、現在に至るまでの道のりは決して直線的なものではなく、一見すると遠回りに見える様々な経路や試行錯誤があったものの、それらは決して無駄な時間ではなく、必要不可欠な「豊かな迂回路」であったと、力強く肯定されました。

講習会の締めくくりに際し、阿部氏は「大学をめぐる厳しい社会状況に目を向けながらも、私たちが共に研究の道を歩み続けるために何ができるのか、連帯の可能性を考えていきたい」という言葉を残されました。この言葉は、学問の自由と探究の精神を尊んできた本研究科の30年の歴史を象徴するとともに、次代を担う若き研究者たちへの連帯の念が込められた重みのあるエールでした。本同窓会は、今後もこのような「知のバトン」を渡す機会を大切に継続してまいります。

第31回公開講座「国際文化基礎講座」が2025年11月15日(土)にオンラインで開催されました。「効果的な英単語学習方法とは？」と題して、本研究科の教員2名が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。

東北大学大学院国際文化研究科
第31回公開講座「国際文化基礎講座」

「効果的な 英単語学習法とは？」

日程 2025年11月15日(土) 13:00~16:30
実施方法 オンライン (Zoomにて開催)
対象 どなたでも参加いただけます。 **参加無料**

【プログラム】
 13:00~開講式 (研究科長より挨拶)
 13:05~講義1
 「効果的な英単語学習法とは? -理論編-」
 講師: 内原 卓海
 (東北大学国際文化研究科 准教授)

14:15~講義2
 「効果的な英単語学習法とは? -実践編-」
 講師: 真家 綾
 (東北大学国際文化研究科 講師)

15:30~16:30 ラウンドテーブル
 質疑応答・意見交換の時間です。お気軽にご参加ください。

[詳細・申込は国際文化研究科webサイトから>>>](#) [こちらからQRコードを読み取ります](#)

東北大学 国際文化 公開講座 Q

お問い合わせ先: 東北大学大学院国際文化研究科 (教務系)
 Email: int-kkdw@grp.tohoku.ac.jp
 http://www.intcul.tohoku.ac.jp

申込締切 11/10




第31回公開講座ポスター

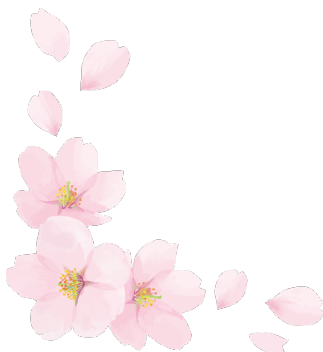
理論に基づいた「効果的な英単語学習法」: 頻度と質の科学的アプローチ

内原 卓海

(応用言語研究講座 准教授)

1. はじめに: なぜ今、英単語学習の再定義が必要なのか

英語学習において、語彙力はすべてのスキルの土台となります。しかし、日本の英語教育における「語彙の壁」は、単なる知識不足を超えた深刻な問題を孕んでいます。文部科学省の学習指導要領では、小・中・高の合計で約4,500~5,000語の習得が求められていますが、実際の英語使用場面では、読解に少なくとも5,000語(理想は8,000~9,000語)、聴解でも3,000~4,000語が必要であるという研究結果が出ています。この公教育と実社会の乖離が、多くの学習者に「いくら学んでも足りない」という無力感を与えています。



指摘すべきは、この語彙不足が「英語嫌い(英語嫌い)」を加速させる主要因となっている点です。単語がわからないために内容が理解できず、授業や試験で常に「ネガティブ・フィードバック」を受け続ける要因となりえます。この心理的なストレスが学習者の自信を奪い、学習意欲を減退させる悪循環を生んでいると考えられます。したがって、単語学習を根性論から解放し、限られた時間で最大の成果を出すための科学的・戦略的なアプローチへの再定義が急務と言えます。

2. 学習対象の選定:「頻度(Frequency)」という絶対的基準

「どの単語から覚えるべきか」という問いに答えることは効率的な単語学習を始めるための第一歩となります。原則として高頻度の単語から学ぶことが推奨されています。実際に、英語の使用場面の約 9 割が、わずかに上位 1,000~2,000 語レベルの高頻度語によって占められているということがこれまでの研究で明らかにされています。一方で学習者は「低頻度語への関心」という罠に陥りがちであり、これは大きな問題となっています。以下の表は、単語頻度リストに基づいた単語のレベル差と学習優先度を示したものです。

頻度レベル	単語例	学習優先度
1,000 語レベル	accept, age, almost	最優先: 英語使用の大部分をカバーする基礎
2,001-3,000 語レベル	achieve, appropriate, airline	重要: 実践的な運用(日常会話・読解)に不可欠
4,001-5,000 語レベル	adore, allergy, ample	選択的: 専門性や文脈に応じて必要時に習得
6,001-7,000 語レベル	abate, adamant, ambiance	低優先度: 出現率が極めて低く、コストが悪い
8,001-9,000 語レベル	abyss, affable, anoint	罠: 学習資源の投下効率が悪い(マニア向け)

”abyss”(深淵)のような情緒的な低頻度語に時間を割くのは、戦略的な誤りです。まずは 1,000~3,000 語レベルである「コア・グループ」に学習資源を集中させることが語彙学習を効率化する最短ルートとなります。

3. 学習パラダイムの比較:偶発的学習と意図的学習の最適バランス

効率的な習得には、「偶発的学習」と「意図的学習」の特性を理解し、戦略的に使い分けることが不可欠です。

- ・偶発的学習 (Incidental Learning) : 多読や多聴など、内容理解の過程で付随的に単語を学ぶ方法です。学習率は 10~20%程度と低いですが、文脈に即した自然な用法を学べます。ただし、定着には最低でも 6~12 回程度の「繰り返し出会う」機会が必須であり、圧倒的な「量」を前提とします。

- ・意図的学習 (Intentional Learning) : 単語カードや穴埋め問題など、習得そのものを目的とした活動です。学習率は約 60%と極めて高い即効性を持ちますが、最大の問題は 保持率 です。学習の 1~2 週間後には 40%程度まで保持率が低下するというデータがあり、一度の学習だけでは「短期記憶」で終わる危険性が高いのです。したがって、意図的学習で急速に知識の土台を築きつつ、それを偶発的学習(多読・多聴)によって補完し、保持率を維持・強化することが推奨されています。

4. 記憶を強化する 4 つの認知プロセス

最後に、単語学習効果を上げるためにできる工夫法について紹介します。単語学習の成果は「量」以上に「注意の質」に左右されます。記憶を強固にするためには、以下の 4 つの認知条件を満たす必要があります。

1. 気づき (Noticing): 単語の形や意味に意識を向けるプロセスです。ハイライトや辞書の使用、文脈からの意味類推がこれに該当します。

2. 想起 (Retrieval): ここでは「認識(見るだけ)」と「産出(思い出す)」を明確に区別すべきです。単語帳を眺めるだけの学習が失敗するのは想起が伴っていないからです。フラッシュカード等で「何だっけ?」と記憶から引き出す負荷(Retrieval Effort)こそが、脳の記憶ルートを強化します。

3. 多様な出会い/使用 (Varied encounters/use): これは「鳥の絵」のメタファーで説明できます。一種類の「スズメ」の絵だけを見ても「鳥」の本質は掴めません。フクロウ、ヒヨコ、南国の鳥など、多様な姿に触れて初めて「鳥」という普遍的な概念が形成されます。単語も同様に、多様な文脈や音声、受容・産出の双方で触れることで、初めて安定した知識として確立されます。

4. 精緻化 (Elaboration): 語源やコロケーションなど、既存の知識体系と関連付けるプロセスです。情報を多角的に肉付けすることで、忘却を防ぎます。語源学習では例えば、predict (予測する)という単語を学習するときに pre- (事前に)+dict (言う)に分解して、その部分の意味を統合した時に全体の意味になることを説明することで(事前に言う=>予測する)記憶の定着を促進することができます。

「効果的な英単語学習法とは？—実践編—」

真家 峻

(言語科学研究講座 講師)

近年、グローバル化の進展に伴い、英語を学習する重要性はますます高まっています。本屋には数多くの教材が並んでおり、さらにインターネットやAIの普及によって、スマートフォンやパソコンを利用して英語を学習する機会も増えてきました。特に、英単語の学習に関する教材は非常に多く見られます。では、実証研究に基づいた効果的な英単語学習とはどのようなものでしょうか。

第二言語習得研究の分野では、単語の知識は外国語の運用能力を説明する主要な要因の一つであり、多くの場合、最も重要であることが明らかになっています。語彙の知識は、リーディングやリスニングの理解度だけでなく、ライティングやスピーキングといった産出的な技能にも大きく関わっています。しかしながら、多くの学習者にとって単語の学習は大きな課題の一つであり、「覚えてもすぐに忘れてしまう」「意味は理解できるものの実際の会話ではうまく使えない」といった問題がしばしば指摘されています。このような語彙学習の課題を解決するためには、「単語を知っているとはどのようなことか」という問いから出発し、効果的な学習と練習を行う必要があります。

語彙知識とは、単に単語の意味を知っているだけでなく、発音や綴り、文法的特徴、使用される文脈など複数の側面から構成される複合的な知識です。また、単語を読んだり聞いたりして意味を思い浮かべる受容的側面(インプット)と、伝えたいことに応じてその単語の綴りや発音を引き出す産出的側面(アウトプット)といった区別も重要です。例えば、単語の意味を理解していても実際の会話の中で適切に使うことができない場合は、受容としての語彙知識と産出としての語彙知識の間に差があることによって生じると考えられています。また、リーディングではその単語の意味が理解できるにもかかわらず、リスニングでは聞き取れないという現象もよく見られます。これは、文字情報から意味にアクセスする語彙知識と、音声を聞いて意味にアクセス

する語彙知識の間に差があるために生じると考えられています。このような違いは、語彙知識がどのような形で学習され、どのような状況で使用されるかと深く関わっています。

第二言語習得研究では、言語学習を効果的に進めるための理論的枠組みとして、いくつかの学習原理が提案されています。その中でも重要な概念の一つが「転移適切性(transfer-appropriate processing)」です。これは、学習時に行われる認知的処理が、実際に知識を使用する際の処理と似ているほど、その知識を引き出しやすくなるという考え方です。例えば、リスニングの場面で語彙を使用するためには、文字情報(単語のスペルなど)としての語彙知識だけではなく、音声情報(単語の発音など)としての語彙知識も身につける必要があります。また、スピーキングで語彙を使用するためには、音声を聞いて意味を理解する受容的な練習だけではなく、意味から音声を引き出す産出的な練習も重要になります。このように、語彙学習では実際に語彙を使用する状況を意識した学習が重要であると考えられています。



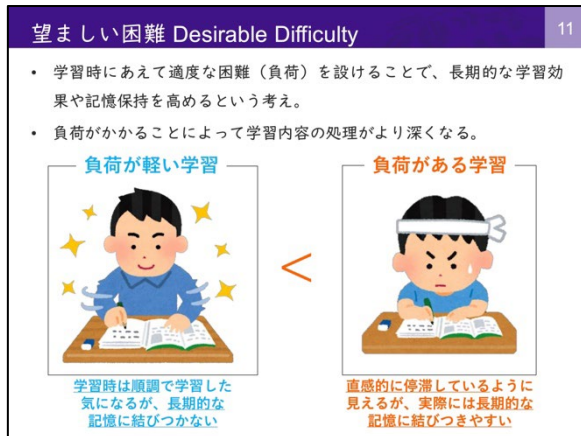
さらに、語彙学習を効果的に進めるための具体的な学習方法として、近年の研究では認知心理学や教育心理学の知見が取り入れられています。代表的なものとして、想起練習(retrieval practice)、分散練習(spaced practice)、交互練習(interleaved practice)などが挙げられます。想起練習とは、単語と意味を同時に確認する(例: apple = りんご)だけではなく、単語を見て意味を思い出す(apple = __)、あるいは意味から単語を思い出す(りんご = __)といったように、記憶から情報を引き出し、自身をテストする練習を指します。このような想起を伴う学習は、長期的な記憶保持に効果があることが多くの研究で示されています。分散練習は、短時間に繰り返して学習するのではなく、一定の間隔を空けながら学習や復習を行う方法であり、記憶の定着を高めることが知られています。また、交互練習は似た内容をまとめて練習するのではなく、異なる項目を交互に練習する方法であり、特に似通った言語項目を区別する学習において効果があるとされています。

単語の知識とは？ (Nation, 2022)		5	
形式 form	話し言葉 spoken	受容 (R) 産出 (P)	どのように聞こえるか どのように発音するか
	書き言葉 written	R	どのような形をしているか
	語形成要素 word parts	P	どのように綴られるか(スペル)
		R	どのような要素があるか(例: tele-vision)
意味 meaning	形式-意味 form-meaning	R	その語の形式は何を意味するか
	概念と指示 concepts	P	その意味を伝えるのにどのような形式を使うか
	連想 associations	R	その語にはどのような概念が含まれるか
		P	どのような語がその概念を意味するか
使用 use	文法機能 grammatical functions	R	その語はどのような文法環境で起きるか
	コロケーション collocations	P	その文法環境でどの単語を使うか
	使用上の制約 constraints on use	R	どのような語句がこの単語と共起するか
		P	この単語とどのような単語と一緒に使うか

2025年度国際文化研究科学生生活調査の結果について

中山 真里子(言語科学研究講座 教授)

これらの学習方法に共通する特徴は、学習者に一定の認知的負荷を与える点にあります。想起を行ったり、学習の間隔を空けたり、練習の順序を入れ替わたりすることは、学習中には難しく感じられる場合があります。しかし、このような困難は長期的な学習効果を高める可能性があることが示されています。認知心理学ではこのような現象を「望ましい困難 (desirable difficulty)」と呼び、学習中に容易に感じられる方法よりも、ある程度の努力を伴う学習方法の方が知識の定着に有効である場合があると考えられています。



このように、語彙学習を効果的に行うためには、単語と意味を機械的に暗記するだけでなく、語彙知識の多面的な性質を理解し、実際の言語使用を意識した練習を行うことが重要になります。また、想起練習や分散練習、交互練習といった学習方法を目的に応じて取り入れることで、語彙知識の定着と運用能力の向上をより効果的に促すことが期待されます。今、利用している教材やアプリなどの英単語学習・練習体系を考えてみましょう。英語を学習する目標(読めるようになる、話せるようになるなど)にマッチしているでしょうか。記憶を定着させるための練習を行えているでしょうか。

円安や物価高の影響により、生活面で経済的に不安定な状況が日本全体に広がる中、学生たちは日々、授業・研究活動や就職活動に取り組んでいます。毎年実施している「国際文化研究科学生生活調査」は、学生の不安や課題を把握し、研究科・大学として適切な支援につなげることを目的としたアンケート調査です。ここでは、2024年10月に取りまとめた調査結果を以下にご報告します。調査は2025年8月13日から9月12日に実施しました。日本語コース在籍者は48名、英語コース在籍者は15名が回答しており、例年並みの回収率でした。

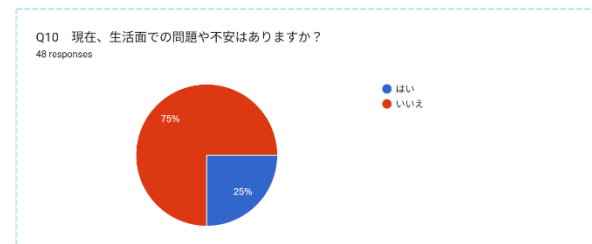
【調査結果】

生活面では、日本語コース在籍者の25%が不安や問題を感じており、その内容は本人または家族の健康に関するものが最も多く、次いで本人または家族の経済状況に関するものでした。一方、英語コース在籍者では不安や問題を感じる学生が13%と較少で、この違いは学生の出身国の影響を反映しているものと考えられます。

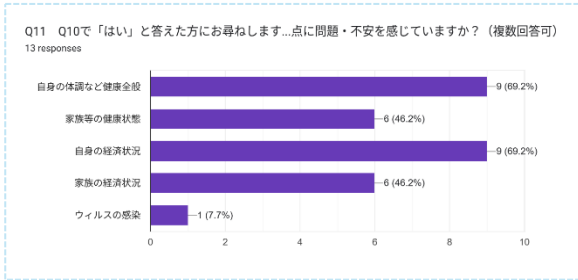
授業・研究活動面においては、日本語コース在籍者の約40%、英語コース在籍者の20%が問題や不安を抱えていました。問題点の内訳はほとんどが院生の研究室におけるWi-Fi環境が悪い(遅い、つながりにくい)という点でした。これに対し、研究科ではネットワークの全面的な改修を行い、ネット環境は現在改善されています。

就職活動面では、日本語コース在籍者の約20%が、英語コース在籍者の半数以上が就職活動に不安を感じていました。理由として、両コースに共通して、日本での就職活動の方法、卒業後のキャリアパス、外国籍の社員を積極的に受け入れる企業の情報などが不足していることが挙げられており、留学生の就職活動に対する支援を今後より積極的に進めていく必要があることが明らかになりました。

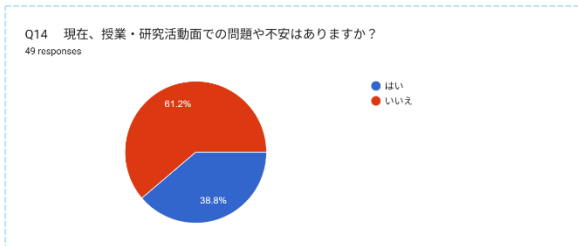
生活面に対する不安



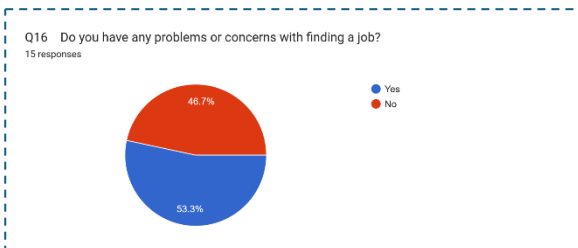
Lucas Heiki Matsunaga
 (2025年3月博士課程後期3年の課程
 修了 国際環境資源政策論講座)



研究面に対する不安



就職面に対する不安



After graduating with a degree in Psychology from the University of Brasilia, I was nominated by the Embassy of Japan to receive the Japanese Government (MEXT) Research Scholarship and pursue graduate studies at Tohoku University. This opportunity marked a decisive turning point in my academic trajectory, allowing me to transition from a primarily disciplinary background in psychology to a broader, interdisciplinary engagement with global governance, resilience, and international cooperation. Specifically, I enrolled in the Graduate Program in Global Governance and Sustainable Development (G2SD) at the Graduate School of International Cultural Studies (GSICS).

My decision to join G2SD was guided by its strong interdisciplinary orientation and its emphasis on international and comparative perspectives. Within GSICS, and with the exceptional support of my supervisors, Professor Toshiaki Aoki and Professor Masahiro Sato, I was able to fully explore research at the intersection of psychology, economics, and public policy. Their mentorship not only shaped my theoretical development but also opened concrete opportunities for international collaboration, applied research, and academic leadership. One of the most formative experiences during my graduate program was my simultaneous participation in the International Joint Graduate Program in Resilience and Safety Studies (GP-RSS), where I engaged in immersive fieldwork and training in disaster-affected areas alongside practitioners and leading scholars in disaster risk reduction and resilience studies. This experience grounded my research in real-world contexts and sharpened my understanding of how psychological mechanisms influence collective action under conditions of crisis and uncertainty.

Also, during my master's degree, I co-led, together with my supervisor, a large-scale international research project on the social and psychological determinants of cooperation during the COVID-19 pandemic. This project examined behavioral responses to public health measures across multiple countries and political contexts, and it was supported by Tohoku University's Front Line of COVID-19 Research funding scheme. Through this project, I gained extensive experience in cross-national research design, international team coordination, and interdisciplinary data analysis. The project generated multiple peer-reviewed publications and provided opportunities to collaborate with researchers and institutions beyond Tohoku University, significantly expanding my international academic network.

With the recommendation of Professor Sato, co-supervisor by that time, I further strengthened my policy-

oriented research experience by working as a research assistant at the Research Institute of Economy, Trade and Industry (RIETI), under a project led by Professor Yuichi Furukawa of Chuo University. This role allowed me to engage directly with policy-relevant research, translating behavioral and psychological insights into discussions relevant to economic policy, governance, and institutional design. At RIETI, I developed a deeper appreciation for the interface between academic research and policymaking, as well as the importance of empirical rigor in informing public debate.

Throughout my graduate and doctoral studies, I actively cultivated international collaborations working with scholars from Northeastern University, the National Taiwan Ocean University, and Tokyo Medical and Dental University, in addition to maintaining strong research ties with my alma mater, the University of Brasilia. During my doctoral research on the psychology of zero-sum thinking, I also collaborated with researchers from Cardiff University and Keio University. Engaging with experts from different fields has prepared me to navigate cross-sectoral academic environments and to identify emerging research questions that become visible only through interdisciplinary dialogue.

These experiences contributed to receiving the President's Award for Outstanding Academic Achievements from Tohoku University and to my development as an early-career researcher, resulting in a curriculum of 25 peer-reviewed publications after just one year of finishing my Doctoral studies, in addition to book chapters and numerous international conference presentations. Alongside my research activities, I actively serve as a reviewer and international consultant for academic journals in my field, contributing to the broader scholarly community.

I am currently a postdoctoral fellow at Tokyo College, the University of Tokyo, where I pursue interdisciplinary research and teaching on cooperation, justice, and global risk. My work seeks to bridge psychological science with policy-oriented and global research agendas, contributing to both academic scholarship and socially relevant knowledge production. During this period, I have also received, as Principal Investigator, JSPS's KAKENHI fundings, including both Start-up (FY2025) and Early-Career grants (FY2026).

Looking back on my student years, I realize that what shaped my academic path most was a willingness to step beyond disciplinary, cultural, and institutional boundaries. Indeed, it was very harsh times for everyone with the constraints imposed by COVID-19. However, these experiences, made possible by supportive mentors, collaborative peers, and international opportunities, showed me the importance of curiosity, persistence, and openness to unfamiliar perspectives. To current students, my advice is to embrace challenges, seek out interdisciplinary and international experiences, and connect your research to broader societal questions, as your time as a student is not only about building expertise but about developing the intellectual flexibility and sense of purpose that will guide your future career.

There will be periods of doubt and challenge that affect both your personal and professional plans, and it is often difficult to predict what opportunities, or even interests,

you will have two to five years from now. What helped a lot during such times was the strong support I received from my supervisors, colleagues, and family, as well as the relationships I built with members of the academic office and the wider university community. Developing a supportive social network fosters a sense of belonging and encouragement that is essential for sustaining motivation throughout your studies. Because of that, I would also like to encourage you to be kind, supportive, and actively engaged in your new community, and to share resources and knowledge generously, as mutual support is fundamental to collective growth in Academia.

布袋 進一

(2025年3月博士課程前期2年の課程
修了 言語科学研究講座)

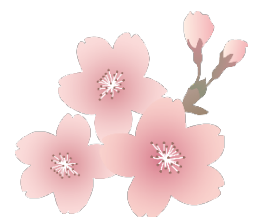
2025年3月に国際文化研究科言語科学研究講座博士後期課程を修了した布袋進一と申します。同窓会会報への寄稿について、お声がけいただき大変光栄に思います。

私は後期課程を修了した今でも、研究室の賑やかな空気や、演習発表の張りつめた時間、院生同士で交わした熱い議論のことなど、鮮明に思い出せます。現在、私は東北文教大学で小学校教員養成課程における英語教育と研究に携わりながら、地域と連携した英語教育活動にも取り組んでいます。最近、地域社会における英語教育の重要性や異文化理解との関係にも関心を広げています。研究テーマも少し変化してきましたが、言語使用を手がかりに、習得や理解の過程に関する認知的・環境的要因を探るという国際文化研究科で培った姿勢は、今も変わっていません。

在学中での出来事を振り返ると、当時、私の研究は、主指導教員の江藤先生はじめ小野先生、上原先生、高橋先生、中本先生、中山先生、講座の先輩方や同輩から、多くの「指摘」をもらっていました。自分では十分に考えたつもりでも、「それは本当にデータに基づいているのか」「理論的枠組みは妥当か」と問い返され、何度か原点に立ち返る必要がありました。その度に先行研究や関連文献を精読し、定義を確認し、研究内容を丁寧に検討するという地道な作業を積み重ねていきました。しかし次は、演習や学会発表、投稿論文の執筆を通じて、自分の考えを他者に伝え、納得してもらい難しさに直面しました。限られた時間の中で論点を整理し、批判に耐えうる構成を組み立てる作業は決して容易ではありませんでした。先の長い暗いトンネルに入ったようでした。しかし、ある時、先生方や先輩方などからいただいた多くの「指摘」は多くの「助言」であるということに気づきました。それからは、多角的に自分の研究を考えられるようになっていきました。そして、新しい別の視点を見つけるとは、自分の研究にそれを取り入れられないかと思案を巡らせていることを繰り返すようになりました。その過程で、様々な「知の巨人」たちと出会うこ

とになりました。私にとっては「知の巨人」たちと出会うことで様々な刺激を受けることとなり、自らの研究がどんどん楽しくなっていました。結果、つらく厳しい研究にも楽しさを見つけ出すことで、何とかのり越えることができました。ひとえに講座の先生方や先輩、同輩の「指摘」、すなわち「助言」によって研究を行うための基礎的な力を徹底的に鍛えていただいたおかげであると思っております。この場をお借りして、皆様に深く感謝申し上げます。

最後に在学中の皆さんにお伝えしたいことがあります。それは、「焦らなくてよい」という気持ちを持って、研究に楽しみを見出すことです。周囲と比べて、とてつもなく不安になることもあるでしょう。しかし、研究は、長い時間をかけて熟成させるウイスキーやワインのようなものです。先行研究や関連文献を精読し、先生方や査読者などの「指摘」と向き合い、データと格闘し、自らの問いを磨き続ける過程そのものが、皆さんの力になります。一見、遠回りに思える経験も、必ずどこかでつながります。皆さんがそれぞれの問いを大切に、自由にそして熱く議論ができる環境の中で、実り多い日々を送られることを心より願っております。



事務局より

事務局からのお願い

①メールアドレス届出のお願い

社会でご活躍されている皆様との繋がりを維持・強化し、研究科から皆様への情報発信を充実したものにするため、同窓会ホームページに掲載している届出用フォームより、皆様の連絡先(メールアドレス)等の情報をご提供いただきますようお願い申し上げます。

いただきました情報は、本学および本研究科同窓会関連の連絡や修了生向けの連絡に使用し、その他の用途に用いず、適正に管理いたします。皆様のご協力を何卒お願い申し上げます。

②会費納入・「国際文化研究科教育研究支援基金」ご協力のお願い

会則 12 条に基づき、学生会員の皆様には会費等の納入をお願いいたします。

- 第12条 学生会員は、入学時及び進学時に入会金及び会費を次のとおり納入するものとする。
- 1 入会金は2,000円とし、初めて学生会員となったとき1回に限り納入する。
 - 2 会費は、次のとおりとする。
 - (1)国際文化研究科前期課程の学生 2,000円
 - (2)国際文化研究科後期課程の学生 3,000円

会費は、郵便局からお振り込みください。

郵便振替口座名称:国際文化研究科同窓会
郵便振替口座番号:02220-5-66621

上記以外の方(在学生、修了生、現・元教職員などの皆様)には、国際文化研究科 教育研究支援基金へのご支援をいただければ幸いです。

<国際文化研究科 教育研究支援基金>
https://www.kikin.tohoku.ac.jp/project/support_the_department/GSICS

郵便振替・銀行振込のほか、
クレジットカード決済
コンビニ決済も可能です。



同窓会総会

第24 回同窓会総会報告

第 24 回総会を 2026 年 3 月4日(水)にオンラインで開催しました。

第25 回同窓会総会について

次回同窓会総会は、2027 年3月に開催予定です。詳細が決定しましたら、同窓会ホームページ等でご案内いたします。

=====



東北大学国際文化研究科同窓会事務局
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41
TEL: 022-795-7556
E-MAIL: int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp
国際文化研究科同窓会ホームページ
<https://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/>